真・恋姫無双　神と人との狭間に生まれて

山本更夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真・恋姫無双　神と人との狭間に生まれて

【Ｎコード】
Ｎ８７４１Ｖ

【作者名】
山本更夜

【あらすじ】
江東の虎、孫堅と竜神との間に生まれた主人公。しかし、彼が生まれた直後に母は主人公を置いて去ってしまう。幼少期、人に化けられず半端な姿のせいで、龍には疎まれ人には怖がられてしまった。
「人は好きだ。最後には受け入れられない運命だとしても・・・わずかな期間でも傍で生きたい。」
そんな彼と恋姫たちが紡ぐ物語です。

主人公設定（前書き）

はじめまして、更夜です。投稿が初めてなのでちょっと緊張中。まずは主人公設定です。

主人公設定

主人公設定
（姓）神（しん）　（名）源（げん）　（字）龍虎（りゅうこ）　（真名）拓也（たくや）

赤目で色黒の肌の青年。普段は黒の短髪→力を使うと赤髪に変化。

父は水龍、母は紅東の虎こと孫堅。しかし、本人は母に会ったことはなく『そんけん』という音しか知らない。（実は孫堅の長子）

龍神の血を引いているため、水辺では異常に強いが、水が無いところは人間と変わらない。だから、自らの力を鍛えるために中国全土を回る護衛として働く。気が向けばたまに族退治もする。
今では数百の組員がいる『郭』のトップ。といっても実際は副組頭がまとめているから本人は気楽にしている。

人は好き。しかし、半端者、という負い目と過去の経験から人間を心から信じられない。よって自分の真名を預けたり、他人の物を預かったりはほとんどしていない。

「人は好き。でも、いつかは離れていく。」

そのせいで『拓也』という真名を知る人間はほぼいない。

劉表時代の荒れていた思春と一悶着あったことがある。今では『バ甘寧』、『臆病龍』と呼びあう仲（笑）。

1話（前書き）

プロローグが短かったのでくっつけてみました。

1話

（プロローグ）

物心ついた時に既に母はなかった。死んだのではなく、役目を果たすために帰ったのだと父は言っていたが、本当はどうか知らない。俺が知っているのは『そんけん』という名だけ。

父は長江に住む龍神だった。しかし、母と交わり俺を作ったため住み処を追われ、ある山の清流のほとりで2人で暮らした。

人に紛れて暮らそうっした時期もあったけれど、父と違ってまだ完全に人の姿に慣れなかった俺は忌み嫌われ、結局居を移した。

俺は禁忌の子。半端者。人にも受け入れられず、龍には蔑まれ攻撃される。信頼できたのは、父さんだけだった。

そんな俺が、今こうして居場所を与えられて生きているのは奇跡に近い。仲間がいて、兄弟がいて…大切なあの人がいて。幸せだ。

足音が聞こえる。間違えるはずもない、大好きなあの人のものだ。

「拓也！」

ほどなくすぐ後ろにやってくる、優しい気配。俺はそっと振り返って彼女の名を呼んだ。

「ーーー」

＊＊＊

（０１）

数人の同士と共に馬を駆る。目的は陳留付近のある邑だ。
俺は長江流域で馬鹿と暴れてから後数年、全土で武技を用いる仕事・・護衛だったり、賊退治だったり・・を行って来た。最初は俺一人で行動していたんだけど、周羽という変な男が勝手に俺についてきてからなぜか同士になりたいという輩が増えて、気がついたらほとんどの地域に拠点を持つ、なんでも屋『郭』なんてものが出来てしまっていた。実際は副頭目についた周羽が仕切ってるから俺は好きに仕事を選んで動いてるだけ。・・もっともそうじゃなけりゃとっとと逃げ出してたな。
人は、好きだ。でも、俺は半端者だからずっと一緒にいられない。いつか離れるなら、縛るものが無いほうがいい。

今回は洛陽にいる顔見知りの商人から陳留付近の治安を見てほしいと乞われて数名で見回りしている最中なんだけど・・どうやら安い金の割にでかい山を押し付けられたようだ。

邑からある程度距離を置いたところで俺は馬を止めた。
小さい邑の出入口２か所に詰め寄せる黄色い鉢巻の集団と、きれいとは言えないがそれなりの鎧を着けた、まとまっている兵士。邑の中には夏侯の旗が立っているところから推察すると、曹操の手勢と最近各地を荒らし回ってる黄巾党との激突のようだ。

俺と同じく馬を止めた周羽が横に並ぶ。中性的な顔立ちの艶やかな

黒髪の美丈夫でありながら、怪力。単身賊のねぐらに突撃して壊滅させるほどの実力を持つ。長刀を華麗に操り敵を地に叩きつける様は壮観ともいえる。
武だけではなく、頭もいい。・・官吏嫌いでなけりゃ乱世でとっくにのし上がってたんだろうなあ。

「陳留は曹操が納めてる土地だから危険は少ない。改めて見回る必要もないと言ったのにごり押ししてきたのはこれが原因ですか。」
「だな。ただじゃ転ばねえオヤジだ。・・・一体どこから危ないって情報を手にいれるんだろうな。」
「わかってはいましたが、商人の情報網侮り難し、ですね。・・・で、どうします？」
「見て見ぬふりはできねえな。食料なんかを運ぶ奴らが見当たらないのに、この邑にこんだけ賊が集まってる。近くにねぐらがあるんだろうさ。・・2手に別れるぞ。俺と周羽が黄色い奴らにぶっこんで奴らを追い散らす。残りはそれを追跡してねぐらを突き止めろ。やっつけられそうなら突撃してもいい。無理だったら陳留の拠点から援軍を呼べ。俺達もひと段落ついたら一度陳留に戻るからよ。」
「へい。」
「俺達は問題ないですが、兄貴達は大丈夫なんで？見た感じですが、曹操軍が押されてるみてえですよ。」
「砦の急襲ならともかく、馬に乗っての野戦は勝手が違うでしょうが。数が多い分手こずりそうでさあ。」
返事と共に、荒っぽいが自分達を心配する声が上がる。可愛い奴らだ。正体を知られてない分はしっかり面倒見てやろうと思う・・って今は関係ない話だった。

「この程度の敵さばけなきゃ大陸じゃ生きていけねえよ。無理だと思う程度の実力なんだったらもっと精進しやがれ。なあ周羽。」
「神源殿の意見に全面的に賛同はできませんが、ある程度の武力は

必要だと思います。わかってると思いますが、我々の仕事では任務失敗が即ち死につながるわけですからね。」
「なんだ、つれねえなあ周羽。」
「私は分を弁えてる人間ですから。」
「へん。」
相も変わらず口の減らない奴。それでこそ周羽、ともいえるか。
そんな俺達の様子を見て他の奴らも無意識に入っていた力を抜けたようだった。
「ま、兄貴達が言うなら大丈夫か。」
「俺たちはゆっくり見物させてもらいますぜ。」
にやにやと笑う同士達に周羽は苦い顔でため息をついた。
「気を抜きすぎて追跡に失敗しないように。では神源殿、行きましょうか。」
「おうよ。」
馬の腹に蹴りを入れてその場から走り出す。今日馬につけていたのはいつもの武器ではなく大斧だったが、大群相手なら丁度いい。

視界の端で周羽が長刀を手に取ったのが見えた。気合いが入ってるなあ・・久々にこいつの大技が見れるとは、今日はついてるようだ。やれやれ、黄巾党の奴らようやく俺達に気がついたのか。人数だけあっても統制の取れてない獣の集まりじゃあ、俺達の相手にはならないだろう。

さあ、大掃除の始まりだ。悪いがとっとと片付けさせてもらうか。こっちも仕事がたまってるんでな。

1話（後書き）

曹操軍に、出会えなかった！！次こそ、必ず・・・！！

2話（前書き）

多くの将の中で凪が一番人間離れしてるって思う今日この頃

2話

（02）

「オラ、死にたくなかったら必死こいて逃げろよ！」
「な、なんだお前らは！」
俺達2人の突然の乱入に慌てている黄巾党の後方部隊に馬ごと突っ込む。人を馬足で蹴り倒したわずかな空間を拡張するため、俺は右腕で大斧を振るった。一振りで胴体が切断され、派手に血しぶきが飛んだ。それをまともに受けた俺も馬も、当然返り血を浴びる。
周りの黄色い兵達がその異様な光景にひるんだ所を見逃さず、俺の左についた周羽が得物で数名の首をはね飛ばした。
一拍置いて吹きあがる血しぶき。周羽は笑みを浮かべながらも次々と敵を切っていく。やれやれ、相変わらず見事な腕前だ。

戦とは、兵を多く用意したものが勝つ。誰もが知っている鉄則だ。
率いる将や君主はそれをまず第一に考え、最善の手を尽くした上で策に頼る。少ない兵で大群に勝つ事は難しいが、実行者は一躍有名になる。当たればでかい博打のようなもの。
しかし、護衛や賊退治を寡勢で戦う俺達にとって、一対多の戦いは常のこと。勝率の低い博打を打ち続けてきた俺達には、それなりに勝つための心得ってのを持ってる。

一つ、敵を倒す時は派手に。血しぶきを浴びて残虐に、殺す。
一つ、戦場から逃げる者は追わない。
一つ、決して後退しない。

人とは本能的に強いものを恐れる。こちらが力を誇示してやれば、力無いものは怯えて背を向ける。敵が減れば楽だし、そうでなくて

も戦闘力は著しく下がる。その隙を叩くのが鉄則だ。そのために派手にやる。
また、金で雇われた場合、俺達は任務の遂行のみを至上とすることが必要になる。依頼主や品を置いて逃げる事は許されず、賊の退治であっても中途半端は逆に賊を激昂させたりと、他人の迷惑になる。第一、敵に背を向けた時点で少数の俺達はまず逃げられない。どっちにしろ終わりってこった。よって、生き延びたければ後退してはいけない。
こなせないやつは死んでいく。俺が暮らしているのは、そんな世界だ。

皮肉なことに、俺は俺の中に流れている龍神の血のおかげで人よりも丈夫だ。ここでは水辺で戦うときの十分の一の力も出せないが、それでも人よりは強い。喜ぶべき、ところなんだろうな。
息をつく間もなくやってくる敵を派手になぎ払いながら、思う。しかし、普通の人である周羽も余裕の笑みを浮かべたまま俺についてきている。もちろん、鍛錬では俺の方が強いが人間の中でもかなり強いと思う。しかも、俺の見間違いじゃなけりゃ、この状況を楽しんでいるみたいだ。荒事に向いてないような顔のくせに、ほんと戦い好きだな。

「な、なんだこいつら。強えぞ！」
「ビビるな、相手は2人だけだぞ。まとめてかかりゃあ俺達の敵じゃねえ！」
「馬だ、馬を狙え！」
誰かの声と共に、矢が周囲から一斉にこちらに向かって放たれた。
相手方に馬はおらず、馬に乗っているこちらは目立つ。狙いはつけやすいだろう。お世辞にも威力があるとは言えない矢だったが、何せ数が多い。自分の身は守ったが、馬に向かってきたもの全ては落とせなかった。

「ちっ。」
嘶(いなな)きを残して体を崩した馬から飛び降りる。体が宙に浮いたところを狙って槍が繰り出されたが、大斧の柄で絡め取っていなし、着地と共に力任せにぶった切った。
馬を倒し、好機と見た黄巾兵がわらわらと寄り集まってくる。同じく馬を失った周羽が俺と背中合わせに陣取ったのが救いだが、すっかり黄色の布を身にまとった賊に囲まれてしまった。倒れてしまった馬の姿はもはや見えない。

普通なら進退窮まった、というところだろうな。あいにくこちとら普通じゃないから全く―いや、ほとんど無問題だ。変更した理由は何だかんだ言って可愛がってた馬を失ったこと。駿馬じゃないけど、大事な馬だった。くすん。
俺が大斧を構えて息を整えていると、あからさまに不機嫌そうな声が背後からした。
「駄馬とはいえ、あっさり弓矢を受けて倒れるなんて。もうちょっと根性を見せてもらいたかったところですね。」
「ひっでえこと言うな。お前だって可愛がってたろ。」
文句を言いながらも、襲い掛かってきた敵兵を頭から両断する。その勢いのまましゃがむと頭上を数本矢が通過していった。そのまま奥の敵に刺さったのか悲鳴が聞こえてくる。
馬という目印がなくなったこの乱戦の状況で矢を放つなんて・・馬鹿だなあ。
「だからこそですよ。突撃の時点で失う覚悟はできていましたが、実際に失うと気分が悪い。本音を言えば、手負いでも連れて帰りたかった。」
「・・ああ。」
「これで仕事だけでなく、これらを叩きのめす理由ができました。もう手加減はしません。」
「してたのかよ！」

「していませんが、この場合こう言ったほうが語呂がいいかと。」
「・・・さっきの声で指揮してるやつの位置は確認できたかんな。若干遠いけど、蹴散らして殺るぜ。」
「応！」

声を上げると同時に、周羽が敵軍の真ん中に突進していく。俺が指示するまでもなく長刀を振るい、文字通り血の道を作りながら一直線に声がした方―指揮官がいるであろう方向に進んでいく。気がついてたってか。流石だけど、一人で突出したせいで互いに分断されて、背中合わせになった意味が全くない。
「やれやれだぜ・・っと！」
当たるをいいことに大斧を振り回して敵を散らしていたら、目の前の敵が急に消えた。いや、正確に言えば敵陣を切り裂いて飛んできた巨大な赤い火の玉が敵数人を巻き込んで爆発した。

・・なんか煙上がってるんだけど。
戦場ではあるが俺も周りの黄巾党の奴らも予想外のことにポカンとしていたら、女の子が火の玉が作った道を拡張するように戦いながら走って来た。
「ご無事ですか！」
「お、おう。」
通常の衣服に胸当てと簡単な装甲をつけただけの装備。むき出しの肌には数々の傷があった。武器は持っていないが、右手あたりに先ほど見た赤い火の玉の小さいものがある。
「加勢、感謝いたします。我らの戦力では黄巾賊の攻撃を抑えられず、苦戦していたところにお二方の参戦。西門の様子はわかりませんが、こちらの戦況は我ら有利に変わりました。」
「そ、そうか。そいつあ、重畳。」
ドカン　ドカン　ドッカーン
大きな爆発音と共に敵が吹っ飛んでいく。視界の端で信じられない

物が見えるため、俺の集中力は一気に低下してしまった。そんな状況でも俺の体はほぼ無意識に敵を倒していく。習慣っておそろしいな。
「もうすぐ曹操軍の本隊が到着するはずです。それまで耐えれば我らの勝利かと！」
「わかった、それまで相手をしてやりゃあいいんだな。」
「はい！よろしくお願いします。」
「おうよ。」
それまで相手してりゃあいいと言っても、彼女の出現で混乱に陥った周りの敵はほぼ無力化されていて。俺、あまり必要ないんじゃねえかな。
そう思いながらもとりあえず大斧を振るってやると遙か遠くから見知った声が聞こえてきた。
「馬の仇、討ち取ったり！神源殿、やりました！」
周羽がやったらしい。あいつどれだけ遠くまで突っ込んでいったんだよ。・・・・ん、他にも何か聞こえるなあ。声じゃない。これは、銅鑼の音か？
「曹と夏侯の旗を確認。お味方です！」

ワーと鬨の声が上がる。砂煙をあげて大群がこちらに押し寄せてきていた。それに合わせて邑の中から多数に矢が放たれ、邑側の兵達が突撃する。統率する者を失った上に、挟み撃ちにあった黄巾賊はひとたまりもなかった。瞬く間に東門の黄巾賊は散り散りになった。ほどなく反対側からも歓声が上がる。
こうして、無事戦いは収束した。だけど・・・。

なぜだろう。なんだか涙がこぼれてくる・・・。

2話（後書き）

主人公、最後は2人にいい所がとられちゃったようです。

3話

（03）

先ほどの人間離れしていた火の玉少女は楽進と名乗った。楽進は義勇軍を率いている将の一人で、敵を倒していた攻撃は『ただの気の塊』らしい。気配を読んでも変な感じはないから、妖魔でもなく神族でもなくただの人だ。信じられないことに。

半分龍の血をひいてる俺だって出来ないぞ、あれ。いや、半分だからできないのか。本物の龍神なら火を吹くことだってできるからな。・・・・へこむ。

「神源殿、他の将軍様達には会っていかれないのですか。夏侯淵将軍など、直に礼を言いたいと仰る方もおりましたが。」

「こっちも仕事の途中なんでね。急ぎの仕事の最中に寄り道しちまったから時間がない。申し訳ないが辞退させてもらうさ。悪いな、楽進殿。」

「いえ。そのような事情では仕方がありません。本当にありがとうございました。」

最後に深く頭を下げて彼女―楽進は邑の中に走って行った。義勇軍を立ち上げるだけあって真面目な良い子のようだ。急ぎの仕事、と嘘をついた事が少し心に痛む。が、権力者に会うという面倒事を回避するためだ。仕方ない。

俺が小さくなる姿に頭を下げた丁度その時、ふっと背後に見知った気配が戻ってきた。

「神源殿、何鼻の下伸ばしてるんです。」

「どこを見たらそんな言葉が出てくるんだよ。お前こそ何処まで行ってんだ周羽。仇取って満足したなら早く戻ってきやがれ馬鹿野郎

め。」
「そのつもりでしたが、首を義勇軍の将らしき人物に渡して戻ってくる途中で、先ほど別れた弟分達を見つけましてね。少し話込んでしまったので時間がかかりました。」
む、と自分の眉間に皺が寄ったのを感じた。
賊の追跡を任せたはずの連中が、まだこの付近にいるってことは・・・。
「あいつら、追跡に失敗したのか。」
「いえ、ちゃんと私達が乱入してすぐ逃げ出した賊を追ったようです。賊はここの近くにあった無人の砦に入って行ったらしいのですが、殲滅するには数が多すぎると。一人はその場に残って偵察を続け、残りは陳留に戻って神源殿の指示を待つつもりだと言ってました。」
「数はいくらだ。」
「ざっと見で５千～８千程度。合流する者を合わせると最悪１万に達するかもしれない、と。」
「『郭』の面子ですぐ動けそうなのは１００程度。拠点を攻めるには差がありすぎるな。これだと忍びこんで火いつけるくらいしかできねえ。」
「山賊のねぐら程度なら効果も期待できますが、戦闘用に作られた砦だと上手くいかないでしょうね。忍びこむ難しさも段違いですから、成功する確率と生きて戻ってくる人数を考えると賛成できません。」
「そうかい。」
頭の良い周羽がそこまで言うなら無理なんだろう。今回の仕事は陳留の治安を確認すること。賊退治が絶対条件じゃないけど、今回の結果から輸送経路を出したり、それを護衛する人間の手配なんかが変わる。今の邑を襲った連中のようにやっつけるのが一番だけど、万に近い人間とまともに戦うほど俺も馬鹿じゃない。
賊は放置して安全が確認されるまでは別の道を使うべきか。それと

も。

「お前は砦の場所わかってんの？」

「はい。一応確認に向かいますか。」

「いや、せっかく利用できそうな連中がいるんだ。曹操軍のお偉いさんにチクってみようぜ。正直会いたくないし面倒だが、話してみる価値はある。」

「嫌です。連中と話すくらいなら放置したほうがましです。」

案の定、官吏嫌いの周羽が嫌そうな顔になって即答した。兵と一緒に戦うのは我慢できるものの、『お偉いさん』と関わるのは我慢できないと言っていたからな。当然か。

「そう言うと思った。だけど無理だぜ。」

「なぜ。このまま居なくなれば済む話でしょう。」

俺の後ろからザッザッと数人の足音がこちらに近づいてくる。隠そうともされていない気配は明らかに強者のそれ。残念な顔になっている周羽は気がついていない。やれやれ、会う気はないって言ったのに連れてきてどうすんだ、楽進よお。

「もう遅いってこった。戦闘中じゃなくても気配には気いつけとけ、周羽。」

「は？」

きょとんとした周羽の声に、まだ幼さを残した女の声が重なる。

「あなた達が2人で黄巾賊に突撃した変態？凪から急ぎの仕事と聞いたから慌ててきたのだけれど、その様子では急いでくる必要はなかったみたいね。」

威圧的な声。これが陳留を統治している英雄、曹操か。振り返らなくてもわかる強者の気配。

俺は、すっと背中に汗が伝ったのを感じた。

3話（後書き）

突然のオリキャラ解説コーナー

《周羽》

字と真名は現在不明。普段は冷静沈着、容姿端麗、文武両道を地で行く万能人間。

出身は揚州で、下級官吏の家に生まれた。自分より優秀な従妹に比べられてグレ、家を出奔。『あんな火付け女なんかだいっきらいだ！』が捨てゼリフだった。

そのせいで以来官吏とか将軍とかが大嫌い。

戦闘とお偉いさんと話さなきゃいけないときに人格が壊れることがある。

4話

（０４）

「・・・・・・。」

俺と同じく、声をかけた人物を察して周羽の顔がさらに残念なものになる。今の奴を見て女性に人気が出そうな美男子だと誰が信じるだろう。いや、ない。

「とりあえず武器は置け。」

俺は大斧を地面に横たえてから、今にも襲い掛かりそうな様子の周羽に注意して背後を振り返る。と、そこには４人の女性がいた。他の面子より一歩前に出ている金髪の女がおそらく曹操だ。覇気が違う。

その両隣にいる2人は髪の色や長さは異なるけどどことなく雰囲気が似ている。親近者とすると音に聞こえる夏侯姉妹か。楽進は居心地悪そうな様子で3人のさらに後ろに立っていた。

雰囲気に飲まれないように息を深く吐いてから、俺はあえてニヤリとした笑みを浮かべた。

「誰か知らないが大層なあいさつだな。こちとら初対面の人間に変態呼ばわりされる事をしたつもりはねえ。」

「では、たった二人で１０００人以上の賊に向かっていくなんて人間を変態と呼ばずになんと呼べばいいのか教えてくれないかしら。我々の常識では考えられないことよ。」

「こっちは仕事柄、少ない人数で多数を相手にするのが普通でな。どの程度なら勝てるかちゃんとわかってるんだ。あんたらみたく『相手より多くないと勝てない』っつう軍の常識と比べてもらっちゃ困る。」

「貴様、華琳様になんて口のきき方だ！無礼者め！」

「名乗りもせず、いきなり相手を変態呼ばわりするほうが無礼だと思いますが。」
残念な顔から醜悪な顔に変化した周羽が相手を小馬鹿にしたような言葉を吐く。こいつ、わざと挑発してるな。それなりにあしらって黄巾賊だけ任せて帰るつもりだったのに面倒なことしてくれるぜ。
案の定、無礼者と叫んだ黒髪の女が激昂して高価そうな曲刀を抜き払った。
「なんだと！そこに直れ。切り捨ててくれる！」
「やめなさい春蘭。」
「っ、しかし華琳様。」
周羽に切りかかる一歩手前で女の動作が止まった。不満そうに己の主を振り返っている。
周羽の方もいつの間にか置いていたはずの長刀を持ち直して構えていた。・・・こら、舌打ちすんな。聞こえるだろ。
「その者の言うことも一理あるわ。非礼は詫びよう。察していると思ったからあえて言わなかったのだけれど、あなた達を買いかぶりすぎたのかしらね。私は陳留一帯を統治している曹操という。今あなた達に切りかかろうとしたのが夏侯惇で、傍らに控えているのが夏侯淵。知っていると思うけれど、後ろにいるのが義勇軍の将で新しく我々に協力してくれることになった楽進よ。」
「俺は神源。こっちが周羽。傭兵みたいなものをしてる。・・・で、陳留を統治されてる曹操さんが、俺達に何の用だ？礼はいらねえって楽進殿に伝えたはずだ。」
「用というものではないわ。たった二人で邑を加勢してくれた酔狂な人達の顔を見に来ただけよ。その二人のおかげで私は大切な将を失わずに済んだのだもの。本当はお礼を言いたかったのだけれど、本人が要らないというから言わないでおくわね。」
「用があるのはそちらの方ではないのか。先ほど、『曹操軍のお偉いさんにチクってみよう』などと話していたような気がするのだが。」

「意外と地獄耳だな、姉さん。」
腕を組んだ夏侯淵がこちらに鋭い目を向けてきた。その話をしていた時はまだかなり距離があったのに、俺の言った言葉を一言一句間違えないで聞きとっている。
それと同時に曹操が出す覇気がさらに強くなったような気がした。
「一体どんな情報を私たちに伝えてくれるのかしら。とても興味があるわ。」
意訳すると『お前らはどんな情報を隠し持っていやがるんだコノヤロー』ってことか。
道理で最初から曹操が喧嘩腰だったわけだ。曹操軍が不利になる情報を、俺達が持ち逃げしようとしていたというふうにも取れる。完全な濡れ衣だけど。
「なに、数人に敵を追わせて連中のねぐらを突き止めさせたのさ。このあとやっつけに行く予定だったんだが、なんと敵は5千～一万程度いるって話だ。それを百人足らずで撃破なんて不可能だろ。で、都合良くここに曹操の大軍勢がいるから俺達の代わりに相手してもらおうかと思った。そういう話だ。」
「へえ、そうなの。」
俺が正直に話した情報に対して曹操が鼻で笑う。
これにカチンときた俺はきっと悪くない。周羽が官を嫌いな理由がなんとなくわかってきたぞ。この上から目線が腹立つ。
「なんか文句でもあんのかよ。」
「随分都合のいい話じゃない。手柄を独り占めしようとしていた癖に、敵わないから私たちに押し付けようってわけ？」
「信用できないな。我々が相手をしてきて一番大きかったのが今回の賊だ。万単位の黄巾賊など聞いた事もない」
「しかし姉者、邑で被害が拡大している以上、この近くに奴らの拠点があるというのは不思議ではない話だ。全くの嘘でもないと私は思う。」
「僭越ながら、私も神源殿の言っている事は本当であると思います。

先ほど近くで戦ってみての感想にすぎませんが、神源殿は嘘を言うような方じゃない。」
「しかし、我々が来なければこ奴らは情報を持ったまま去っていただろう。凪が去った後にすぐに情報が入ったというのも胡散臭い。拠点があるというのが本当でも、あえて偽の場所を伝える可能性もある。」
「・・本当に、官というのは話が通じない。」
ぎゃあぎゃあ騒ぐ将達に、周羽が険しい表情のまま吐き捨てるように言った。長刀を握る手はわなわなと震え、額には青筋が浮かんでいる。
「あなた達と違って私たちは手柄や名声など欲してません。仕事の都合上、この付近に賊がいると都合が悪い。だからこそ先の戦いに参戦したし、賊のねぐらも突き止めた。ただ都合が悪いだけで、必ず退治しないといけないわけではないんです。あなたの軍勢がこのまま帰ると言っても別に問題はありません。」
「まあ、そういう事だ。俺は別にあんた達がどう動こうと興味ねえんだ。帰るならそれでいいし、興味があるなら場所を教える。」
そう言うと、曹操は腕を組んで少し考える様子になった。

ちらり、とこちらにやった視線が交わる。先ほどのような威圧感はもう感じなかった。深みのある青い瞳は底が見えない。ふと、生まれた長江の景色が脳裏に浮かんだ。
一番底まで潜ってただ寝転がっているのが好きだった。俺のいるところまでは光が届かず、ただ静けさだけがあった。他の龍神も来なかったし、人の声だって聞こえない。俺だけの、場所。

ふう、と曹操が息を吐いて目を閉じた所で俺ははっと現実に戻った。
「わかった。今回はあなた達を信じることにするわ。その場所まで案内して。」
「華琳様！危険です、このような素姓の知れない者を近くに置いて

おくなんて。」
「大丈夫よ。いざとなったらあなたが助けてくれるでしょう。頼りにしてるわよ、春蘭。」
「華琳様あ！」
「華琳様、私は頼りにして頂けないのですか？」
「もちろん、あなたも頼りにしているわ秋蘭。凪も、よろしくおねがい。」
「はっ。」
とたんに漂い出す桃色の空気。張り詰めていた空気が嘘のように無くなった。
・・・は？なに、この甘い空気。
俺が唖然としていると、周羽が傍に来てこそりと耳打ちをした。
曰く『曹操は大変な女好きで、側近とは夜を共にしていることでも有名です。』だと。
人の趣味に口を挟むのは野暮ってものだが、すげえなあ。一人に絞らないってのも信じられん。
もし、俺が人を愛するとしたら・・・なんてな。やめよう、あり得ない未来を考えてもむなしくなるだけだ。人は必ず俺から離れて行く。そういうもんだ。
・・・しかし周羽。お前こういう情報をどこから拾ってくるんだ。

4話（後書き）

一話一話の長さが違ってすみません。なかなか春蘭が納得してくれないからこんなことに・・・。

閑話―1（前書き）

閑話は他の人視点で進めます。今回は星視点です。

閑話―1

（閑話1―　子龍と半端者）

私は趙子龍。大陸中を旅した後、今は劉備殿と天の御使いである本郷殿の元に仕官した。我が主である二人は、武に秀でているわけではなく知が長けているわけでもない。しかし、天下を憂う心と崇高な思想を持ち、個性的で優秀な人材を扱う大きな器がある。仕官してまだ日は浅いが、ここに来た私の目は正しかったと思っている。

問題があるとすれば、主殿に劉備殿を筆頭として重臣達皆が参っているところだろうか。きれいな花には蝶が群がるのは当然のこと。しかし、皆が皆主にぞっこんというのは多少気味が悪いと思う事もある。

まあ、私は好きな人物ほどいじめてみたい困らせてみたいという悪い癖があるゆえ、主としては私に恋愛感情を持たせなかったことは良いことだったかもしれぬな。

私が好意を寄せていた人物は、流れ者だった。父親は普通の人に見えた。しかし息子は人型ではあったが赤髪赤目で皮膚にはうっすらと鱗の様な変な模様が浮き出ていた。とても普通の人間には見えず、村人は彼を怖がり敬遠した。私は別に怖くなかったので、両親の制止も無視してよく親子の住む裏山へ遊びに行ったものだ。

彼らが常山に滞在していた期間は半年程度だったが、その間はとても楽しかった。

だがまあ、今考えると幼い頃の私の愛情表現はひどかったように思う。当時の私に自覚が無かったのもあるが、事あるごとに虐めて追

いかけまわし、最終的に力づくで相手の真名《拓也》を奪ったのだからな。
だが、私だけでなく奴も悪い。私がせっかく真名を交換してやろうとしたのに変な目で見て、挙句の果てに
「信頼してない相手とは、交換しない物なんだろ。」
ときた。

腹が立った私は槍を持って奴を追いかけまわし、無事に奴の真名を得たのだが、その時以来奴は私の気配を感じると隠れてしまうようになった。と言っても龍の血を引いている証である赤髪は発見しやすいうえ、実際は私の方が気配を読むのが得意だったため隠れても全くの無駄だったわけだが。まったく、てれ隠しもいい加減してほしいものだった。こっちはただ奴に会いに行っただけなのに。まあ、会いに行っても最終的に槍で追いまわしたり、川に突き落として自分も飛び込んだり、嫌がる奴を無理やり蜂蜜狩りに連れて行って一緒に蜂に追いかけられたりという結果になることが多々あったなうむ。

しかし、私がどんな行動に出ようとも奴が本気を出すことは無かった。龍神の息子である証拠、いわゆる水を操ったり、猫としゃべったり等人間には為し得ない技を幾度か見た。その能力を使えば私のような人間の小娘はちょいとひねる事ができるであろうに、逃げるばかりで決して私を傷つけようとはしなかったからな。
そのくせ、私が本当に危ない時・・調子にのって崖から落ちた時に身を呈して庇ってくれたり、突然熊が現れて私が硬直してしまった時も、半泣きになりながら私を抱えあげてすさまじい速さで逃げてくれた。

そのような態度をとられると、私のような者は嬉しくなってつけあがるのだ。

・・うむ、そう考えると奴の自業自得という部分も大きいな。優しさは罪、とはよく言うものだ。

あの親子が何も言わずに裏山から姿を消してからもう長い月日が経ってしまった。大陸各地を巡ったが、それらしき人物の噂は聞かなかった。奴の容姿は目立つから、旅をする途中で会えるかもと思ったが考えが甘かった。・・・一体、今どこで何をしているのやら。

「めずらしいな、酒を飲んでる星がため息をつくなんて。柄にもなく悩み事か。」

「！愛紗か。驚かせるな。」

「別に驚かせるつもりはなかったのだが。本当にどうした？いつもなら私が声をかける前に気がついていただろうに。」

はあ、と思わずため息をついた時に不意に声をかけられて、心臓が跳ね上がった。愛紗が来たのに気がつかぬとは、趙子龍としたことが。不覚。

「・・仕方なかろう。私とて、四六時中気を張ってるわけではないのだ。」

「拗ねるな。しかし、そこまで気もそぞろなお前も珍しい。なんだ、昔付き合っていた男の事でも考えていたか？」

いつもからかっている仕返しのつもりなのか、愛紗がにやりと笑う。核心に近いのがまた腹立たしい。まあ、素直に認めるつもりは全くないがな。

「私に愛をささやいた男など、数が多すぎていちいち覚えていられぬよ。・・・なに、大したことではない。この城の将軍はどうしてメンマの良さに気がつかず、メンマ用の予算を作ってくれないのかと、憂いていただけだ。」

「何を悩んでいるかと思えば、馬鹿者！民の血税でそんな予算を作れるはず無いだろう！」

「何を言う。愛紗、お主はメンマの良さをこれっぽっちも理解していないのだな。そもそもメンマとは・・・」
「もういい！元気がなさそうに見えから来てみれば、そんな事とは。心配して損をした。」
プリプリと肩を怒らせて愛紗が踵を返した。・・・・心配してくれたのか。そこまで落ち込んでいるように見えたのか、私は。
「私もまだまだ修行が足りぬ、な。」
グビリと煽った酒は、いつもより苦く感じた。

閑話―1（後書き）

唐突ですが、筆が進んだのでこちらを先にアップしました。
私のイメージする星はこんな感じ。

5話

盗賊のねぐらにしては、やたら堅固な砦だと思った。曹操が言うには戦略的に不必要になった砦が無人のまま捨て置かれるというのは珍しくないらしいが、ここまで立派なもんをポイと捨てるとは・・お偉いさんの考えることは本当にわからない。
そうしてタダで拾った砦だからだろう。・・目の前の黄巾連中もあっさりと砦を捨てる気のようだった。門前に荷車を出し、せっせと荷物を積んでいる。

連中の視界ギリギリに軍を止めた曹操は、ふうと息を吐いた。
「危ないところだったわね。一足遅ければ、連中はここを捨てて別の本拠地に移っていたところだったわ。」
「だろうな。しかし、こうまであっさり荷物を移すって他の根城も確保してるってことだ。賊退治も大変だな、州牧さんよ。」
そう言うと、俺の口調に腹が立ったのだろう、左側からぶわっと殺気が溢れる。・・・偉い州牧様につく怖い番犬は本当に発火点が低いみたいだ。
シャキン、と大剣が鞘から外れる音と共に、空気がビリビリ震えるほどの怒声が響いた。
「貴様、華琳様になんて口をきく！」
「やめなさい春蘭。」
「・・・・は。」
このやりとりも何度見た事か。不満な顔を残したまま一瞬で大人しくなった番犬はしゅんと肩を落とした。
「悪かったわね、神源。」
「そう思うなら、俺をここから解放してくれないか。情報が正しかったのは証明されたはずだ。」
俺は今右に曹操、左に夏侯惇、後ろに楽進と見知らぬ女性武将２人

に囲まれている。夏侯淵は曹操を挟んで右隣。夏侯淵の両手は手綱ではなく弓をしっかり握っている。姉妹そろって物騒すぎる。夏侯惇が怒鳴らなかったら場合は私がその頭をぶち抜いてやったってか。冷静そうに見えるけど、この2人中身はそんなに変わらないんじゃないのか。

ちなみに、周羽は残っている同士を陳留に撤収させるついでに偵察に行ったからここにはいない。ちくしょう。

「あら、あなたの部下がまだ戻ってきていないのに、先に逃げるつもりなの。」

「逃げるわけじゃねえよ。乗りかかった船だし、きちんと戦うさ。俺が言ってるのは、この空間から解放してくれって言ってんだよ。視線が痛くてしょうがない。」

正確に言えば、周羽も部下というより同士の1人なんだけどな。ここで説明しても仕方ないから聞き流すことにする。

苦い表情の俺とは対照的に、曹操はとても楽しそうな様子だった。

「あなたの部下が戻ってきたらすぐに軍議を始めるわ。主だった人物がまとまっていた方が楽でしょう。」

「俺は別にあんたの所の兵じゃない。」

「ええ。だからこそ、ここにいてもらっているのよ。あなたは私の兵ではないのだから、私の号令で動くわけではない。直接お願いするしかないから、あえてここにいてもらっているのよ。何か文句がある。」

「・・・お願い、ねえ。」

「・・神源殿。」

物は言いようとはよくいう、俺がそう言おうとした矢先に1頭の馬が軍を突っ切って目の前までやって来た。

いわずもがな、周羽だ。見事な手綱さばきで奴は俺と曹操の前に颯爽と馬を止めた。

「城にこもっている敵は八千人程度でしょう。まだ我々に気がついていない様子でしたよ。」

「そう。」
「構成年齢はどんくらいだ。」
「若い男が中心ですね。見張っていた者によると、1刻前までは老人や女子供もいたそうですが、私が見たところでは確認できませんでした。」
「ほう。弱い者を先に逃がしたということか。賊とはいえ、最低限の情は持っているらしいな。」
薄いたのが曹操で、年齢を聞いたのが俺。うなずいたのが夏侯惇だ。嬉しそうなのは、弱い者がいなければ思う存分腕をふるえるからだろうか。
「さて、そこまではわかりません。賊の心情までは私ははかれませんから。」
「それもそうだな。して、華琳様、どういたします。」
今まで黙っていた夏侯淵がそっと主の顔をうかがった。主―曹操は不敵に笑った。
「こちらに気がついていないなら好都合。このまま一気に突撃して砦を落とすわ。春蘭、秋蘭は前曲を率いて進軍。敵兵をなぎ払いなさい。」
「はっ」
「御意」
返事と同時に両将軍が馬を駆って前に進む。その姿はすぐに兵士たちにまぎれて見えなくなった。
「楽進、李典、于禁は義勇軍を率いて春蘭達の後に続きなさい。神源、周羽も義勇軍と共に戦ってくれるかしら。」
「は」
「まかしとき」
「了解なの～」
「わかった。」
これがお願いかよ、と思いつつ俺は後ろの三人に続いてうなずく。
周羽は無言だったがすい、俺の隣にに騎馬を寄せていた。

「私と桂花は本陣を率いて続きます。桂花、大丈夫だとおもうけど伏兵には注意しておくこと。」
「お任せ下さい。」
主だった面々に指示を与えると曹操は大鎌を振り上げて高らかに叫んだ。
「では、総員、配置につけ。―突撃！」

『うおおおおおおおおおお』
天をも震わす声が響き、曹操軍は一直線に突撃を開始した。

5話（後書き）

都合上、旗を置いてくる話しを入れられなかった・・・。
しかし、戦闘描写の上、まだ仲良くないから会話が弾まなくて苦しいっ（泣）

6話

（06）

突撃からさほど時間がかからずに、あっさりと砦の門が開かれた。
「門が開いたぞ！曹操軍の精兵達よ、一気呵成に砦を制圧するのだ！」
『応！』
夏侯惇の声に続いて盛大な鬨の声が上がった。魏の正規兵が一気に砦の中に攻め込んでいく。そのあとに楽進達率いる義勇兵と俺、周羽が続いて突入した。

実際の戦闘は、というと楽の一言につきる。
義勇兵と違い本格的に兵士として鍛えられているだけあって、先行した曹操軍の兵士たちは強かった。個人的な武技に関しては一対多数の戦いを生き抜いてきた俺の同士達のほうが上だろう。しかし、こと連携に関しては曹操の兵士たちの足元にも及ばない。一人が上段から切りかかり、相手が剣で受け止めた所をもう一人が横から当て身をくらわす。ぐらついたところをさらにもう一人が止めを刺す。手間のかかる作業に見えて、大した時間はかかっていない。
先の戦いでは周りが賊だらけで曹操軍の動きは見ている暇がなかったけれど、一人の相手に対して二人、三人と有利な形を作った上での息の合った攻撃は見事としか言いようがなかった。

俺が戦う相手―主に商品を狙う盗賊達―は多人数でかかってきても連携がとれていないのがほとんどだ。その隙をついて一気に倒すのが一般的な護衛としての戦法だ。こうまで上手く当たられると俺や周羽はともかく入ったばかりの連中は苦戦するだろうな。
陳留付近にも武を強みにして名をはせている集団がいくつかあるが、

その中でも暗殺や裏取引に手を回している連中は多い。そんな連中がこの軍に叩かれることもそう遠くないはずだ。『郭』はあくまで真っ当な依頼しか受けていないから心配ないけど。

しかし、統治手腕といいこの軍といい、やはり曹操は切れ者だな。俺と周羽を義勇兵の方に回したのも自分達の軍とは上手く合わせられないと見抜いたからだろう。まったく、やりにくい御仁だぜ。全く、こんな化け物と関わるのはこれっきりにしたいね。

「はあっ！」
ドガガと派手な光があがってて目の前壁が崩れる。言わずもがな、楽進の気弾である。大雑把なのか知らないが彼女は回り道をしない。壁が現れたら気弾で壊して突き進む。こっちとしちゃ楽といえば楽だけれど、龍の血をひいてる俺としてはやはり涙が出そうになる・・・。

「神源殿、なにか。」
「・・・いや、なんでもねえ。先に行こうぜ楽進殿。」
「凪ちゃん凪ちゃん、なんでもないって言ってるんだから先へ進もうなの！」
「しかしだな。」
「ええから先に進も。手間かけてたら旗を立てる暇がなくなってまう！」
「夏侯惇様には悪いけれど御褒美は絶対渡さないの！」
「御褒美って・・こら真桜、沙和、押すんじゃない！」
楽進本人はまだ怪訝そうな表情だったが、きゃいきゃい騒ぐ二人に押される形で先に進んでいく。そうそう、俺のことは気にせずにとっととやっちゃってくださいお姉さん達。
砦の中に入ってから俺と周羽、そして義勇軍を率いていた3人は成り行きでまとまって戦っていた。ちなみに、二本の刀を操って戦う

お姉さんが于禁で、螺旋槍という不可思議な武器を扱うお姉さんが李典というそうだ。
あ、あと一言もしゃべってないから存在感ゼロだけれど、周羽もちゃんと俺の後ろにいる。ちなみに官吏嫌いの奴は突入してから一度しかその武器を振るっていない。

「オイ周羽よ。拗ねているとはいえ、もうちょっと真面目に働いたらいいんじゃねえか。」
「私の所に獲物が来ないのですから仕方ないでしょう。必要最低限の仕事はしていますよ。自分の所に降りかかってくる火の粉は自分で払っています。」
「張り切れとは言わねえが、せめて払う範囲をもう少し広げちゃあどう」
そう言いかけた時だ。こつん、と左足が何かに当たった。左側の壁が、少しでっぱっていた。隠し部屋、か。
「・・・神源殿。急にだまられると気になるのですけれど。」
「静かにしろ。」
〈不服〉と書いてある周羽の口を押さえて気配を探る。殺気はない。が、かすかに人の気配がある。
必死に息を殺しているからか、見逃すところだった。
俺と同じものにどうやら周羽も気がついたらしい。目で口をはずすように訴えてきたからその通りにしてやった。
楽進達とは距離が少し離れすぎている。声をかけたら気がつかれる。
周羽は俺から一歩下がったところで長刀を構えなおして俺に向かってうなずいた。俺は周羽にうなずきを返し、音をたてないように出っ張っている壁と正対した。

いくしか、ない。

腰に斧の柄を当てて刃を寝かせる。俺はすっと息を吐いて集中する

と、腰を支点にして斧を振った。固い岩の感触に逆らうように、思い切り振り上げる。

ガラガラガラ

「一体なんや！」

轟音を立てて壁が崩れ落ちる音の他に李典の驚いた声が聞こえたような気がしたが、確かめる余裕はない。

壁を形作っていた岩が全て地におちる前に、無言で切りかかってきた人影がある。白髪の老人だった。震える手で持っていたのは刀ではなく、農作業に使う犂を振り上げて、斧を振り切っていた俺の頭めがけて得物を振り下ろした。が、

「甘いですよ。」

それより早く俺と老人の間に入り込んだ周羽が一振りでその命を絶った。

どさりと力なく石床に落ちた肉体は慣性に従って下へ転がり落ちて行った。・・俺が切ったのは隠されていた地下への入り口で、老人は門番だったってことか。

「嫌なモンを引き当てたなあ。」

斧を立てて額をかく。肉眼では見えないが、下には数多の人々の息遣いと隠す気もないだろう殺気。門番が倒れたことでやり過ごすことはできないと悟った人々が、覚悟をきめたからだろう。

「自分から死ににくる奴とはやりたくねえんだよな。」

「何も自分達だけ貧乏くじをひく必要はないと思いますよ。そこの3人も巻き込むべきです。」

周羽の視線の先には音に驚いて戻って来ていたのだろう楽進、李典、于禁の唖然とした表情があった。

6話（後書き）

表で戦っているのは元気な若者たち。では、地下室で身をひそめているのは・・・・？

7話（前書き）

※残酷描写注意

7話

地下へと続く階段は意外と広いものだった。脇に仕掛けや小部屋があるわけでもなく、それはただ一つの部屋までまっすぐに俺達を導いていた。
松明の明かりもなく、真っ暗な空間。ビシビシと肌に突き刺さる殺気を受けながら俺と周羽、そして3人の武将達は足音を殺してその階段を下りて行った。
明らかに隠れるために作られた壁。先ほどの門番が老人だったこと。そして周羽の報告では発見されなかった女子供、老人の姿。
ここまで手がかりをあたえられては、この先の殺気がどんな人々の物なのかわかるというものだ。隣にいる周羽の顔がさえないのもこれが理由だろう。

賊になりたくてなる人ばかりじゃない。飢饉があった、税が重くて払えない、払えなければ死罪、払えても飢え死にしかない。そんな人々が自分と家族の生きる糧を得るために賊に身をやつす。そんな夫を、息子を、父親を支えるためにその家族がまた賊になる。いかんともしがたい負の連鎖だ。
俺が今まで戦ってきた連中の中にはそういう人々も多かった。・・・だからって手を抜いた事は一度もないが。

人は、好きだ。出来るなら殺したくないし、望めるなら仲良くしたい。でも、知らない誰かより知っている身内。守るべき対象をないがしろにしてまで情けは掛けない。

・・・俺はもう二度と後悔したくないんだ。

先を行く曹操軍の武将はこころなしわくわくしている様子だったか

ら、この先に誰がいるか気がついてないんだろう。隠し部屋に未知との遭遇。階段に入る前に李典が『なんかお宝が眠ってるかも』などとアホな事を言ってたしな。この3人は義勇軍の将。・・義勇軍なんてもんは力の無い日人々を助けるために立ち上がった一般の民の集団だからな。この女の子達ははたして、目の前に現れた人々相手に武を揮えるのだろうか。

俺がそんなことを考えているうちに長い階段は終点を告げた。が、目の前に佇むのはまたしても石の壁。しかも、俺がさっき切った壁より厚そうだ。賊のくせに、ずいぶん面倒な事をしてくれる。

「行き止まりだ・・・。」

楽進が茫然とした様子で呟いた。

「いや、でもこの先に誰かおるんは間違いない。それに見てみい、床になんか引きずった跡があるやろ。誰かが外側からこの壁引きずって部屋に蓋したんや。」

「沙和もそう思うの。中からひしひし人の気配が伝わってくるの。神源さん達はどう思う？」

「俺もあんた達と同意見だ。」

李典と于禁の問いに俺は軽くうなずいて大斧を持ちなおした。

「邪魔な壁をぶった切るぜ。一緒に切られたくなかったら3人とも下がれ。周羽、お前は補佐を頼む。」

「相変わらず、神源殿は甘いところがありますね。いずれ死にますよ。」

義勇軍出身者に弱い者いじめはあまりさせたくないという俺の考えを正確に理解した周羽が、面倒そうに髪をかきあげた。そう言いつつも3人を片手で制して後ろに下げ、前に出てくるあたりこいつも大概甘い。

「うるせえ、生きてる奴あ、いつか死ぬんだよ。お前こそ人のこと言えんだろうに。」

「何をおっしゃる。階段を見つけた時に後ろの3人を巻き込もうと

言ったのは私ですよ。」
「それでも、だ。―行くぜオラア！」
中途半端な速さと強さでは折れるのは斧の方だ。俺は腹の底から気合いを入れて、今この姿で出せる力を込めて大斧を振るった。

ゴキイン、と派手な音が響いた。一拍、後俺達の前にある石壁がガラガラと崩れ落ちると同時に俺の大斧の柄から先が粉々に砕け散った。ち、やっぱ保たなかったか。
「神源殿、これを。」
「おお、助かるぜ。」
俺の横を駆け抜けざま周羽が懐に忍ばせていた短刀を投げてよこす。周羽はそのまま切りかかって来た奴を長刀で一合も合わせずあっさりと切り捨てた。
その場に鮮血を撒き散らして倒れたのは長い髪の女。手に握られているのはボロボロに錆びた剣で、周羽の長刀に対する武器にしては頼りなさすぎるものだった。
「やれやれ、予想通りだとしてもやりにくいなあ、こういうのはよお！」
相手の懐に飛び込み、逆手に握った短刀で首の動脈を狙う。傷口から吹きあがった血は天井まで達し、俺と周羽の体を赤く染め上げた。

老人、女、子供。戦力として数えられない人間が押し込められたこの地下部屋は予想以上に広かった。数百は下らない人間達が次々と襲い掛かってくるのを周羽と共に入り口付近に陣取って撃退する。通常の精神状態ならこの異常事態に怯えて戦意を無くしてもいいものだが、もう後がない賊軍は一向に引く気配を見せない。彼らに実力は無いし、一対多の戦いを生き抜いてきた俺達にはこの場で数百切るくらいなんともないが、気分が悪くなるのはどうしようもなかった。
「神源さん、周羽さん、ちょっと待って！」

「そうだ、見ればこの人達は老人など戦う力のない人達！殺してはだめだ！」
ようやく我に返ったのか、後ろから抗議の声が上がっている。殺すな、だと。冗談きついぜ、お姉さん達。
「馬鹿言え、武器を持って襲い掛かってくる相手に情なんかかけられるか。俺は死ななくていいのにあえて死にに行くような趣味はねえんだよ。」
「しかし、」
「止めさせたいならあなた達3人でなんとかしてください。彼らが武器を捨てて投降するならこちらも疲れなくて良いですから。・・無駄だとおもいますけど、ねっ！」
長刀を振るう合間に周羽が足元に重なった遺体を奥へ蹴りやった。足場を確保するためにやむなくとった行動だったのに、それがさらに3人を激昂させた。
「あんた、何やってんねん！」
「それでも人間なの！」
「あいにく私の父も母もれっきとした人間でしたよ。しつこいようですが、止めさせたかったら早くなんとかしてください。あなた達が手をこまねいているうちに、被害が大きくなりますよ。」
「ぐっ。」
悔しそうにうめいたのは楽進だろうか。はは、これで確実に後ろの三人には嫌われただろう。
傷つく必要はない。わかっている。こんなことがなくったって、俺は人には受け入れられないんだから。
またひとり、借りた短刀で賊の命を刈り取りながら俺は自嘲の笑みを浮かべた。

7話（後書き）

長さが中途半端になりそうなのでここで一度切ります。

8話（前書き）

お気に入り登録、４０件だと・・・！？本当にありがとうございます。

ちょっと短くなってしまいました。

※残酷描写注意

8話

「やめて、皆武器を下ろしてほしいの！」
「抵抗しなければ命の保証はする。だから、投降してくれ。」
「曹操さまは糧食も十分に用意しとる！投降してくれれば腹が減ってる奴らにもたっぷり食べさせてあげられるんや！」
3人の後方での必死の説得だが、全く効果はない。人々はむしろ怒りの表情を浮かべて俺達を攻撃している。お願いだから、これ以上相手のやる気を上げないでくれよ、お姉さん達。
俺は、短刀を相手の鳩尾に突き刺してからその遺体を遠くに頬り投げながら思った。

「嘘をつくな！」
一人の老人が彼女らの言葉に対して怒号を上げた。細い腕で錆だらけの斧を振りかぶっている。
「わしらが好きでこんな事をしていると思うてか。食うに困り、力ない我々があつまって命をかけて食料を集め、ここまで生き延びてきたんだ。」
老人の必殺の斧はあっさりと周羽が軽くはじき、彼は数歩よろめいた。彼だけ切り倒さず、はじいただけなのは話の続きを彼女達に聞かせるためだろう。
楽進は苦しそうな顔で老人を見つめた。
「苦しかったのはわかる。だからと言ってひもじいから別の人から食料を取ったり、人を殺したら駄目なんだ。」
「わかるものか！賊にならねばならなかった我らの苦しみが、貴様らなどに。・・その上お前達は我々が命がけで集めた糧食を焼き払っているではないか。それで新しく食料が与えられるなど・・どうせ嘘に決まっておる！」
「嘘じゃない、全部ほんとの事なの！。」

于禁の叫びも追い詰められた賊には通じなかった
「嘘だ。ならなぜいきなり攻めてきたんだ。」
「軍なんて皆うそつきだ。」
「殺せ！」
「食料があるんだったわね。こいつらを殺して私達が食料を手に入れましょう！私達の生きる道はもうそこにしかないの！」
『応！』
「そんな・・。」
李典の呆然とした声は人々が上げる大きな声にかき消された。
賊軍の中からあがった大きな女の声に呼応し、人々がボロボロの武器を掲げる。さっき周羽が吹っ飛ばした老人を先頭にして、一気に俺たちに襲い掛かって来た。
「言わんこっちゃねえ。余計に相手の士気が上がっただけだ。」
「戦いが始まる前ならともかく、実際に戦闘状態に入っていますから。官と名のつくものに逆らったらどうなるか、民は身にしみて知っているんでしょうね。これが、現実ってものですよ。」
周羽は皮肉げに吐き捨てて、今度はあっさり老人を屠った。返す刃で一気に5人を打ち倒すが、絶え間なく賊は襲い掛かってくる。
もちろん俺も絶え間なく短刀をふるっているわけだが、いかんせんリーチが短く多くの相手に対するには不利だ。壁壊したときに斧もぶっ壊れたのが痛い。あん時はここまで人数がいると思ってなかったから対して気にしてなかったけど、必然的に多く働く必要がでた周羽には申し訳なく思う。あいつ、なんだかんだ言って先頭に立って、賊が楽進達に回らないように配慮してるものな。本当に、甘いのはどっちなんだか。
でもまあ、実力が離れてるから俺も周羽も死んだりしない。ただし、後ろで手を出すか迷ってる3人が手を出すか出さないかで楽さが全然違うんだが、期待するだけ無駄か。
ちらりと、ごくわずかな隙をみて後方を振り返る。受け入れられない現実を目にした三人は、武器を振り上げようとしていなかった。

どうしたらいいかわからない、顔にそうはっきりと書いてある。この場ではもうえないだろうな。

結局、楽進、李典、于禁の3人は俺達の後ろから一歩も前に進むことなく、俺と周羽は数々の裂傷をこさえ、時間はかかったものの賊を皆殺しにしたのだった。

「ホント、貧乏くじだったぜ。」

俺はぐったりと肩を落とした。人間と龍の混血だって疲れるものは疲れる。肉体的にも、もちろん精神的にもだ。

俺は短刀についた血を服の汚れていない場所でぬぐってから周羽に投げ返した。周羽が無言でそれを受け止めた時、戦闘終わりの合図である銅鑼が大きく鳴り響き、勝ちどきの声が上がったのだった。

9話

当初の予定通り、曹操軍は黄巾賊の砦を制圧し、糧食を燃やしつくすことに成功した。砦に堂々と翻る様々な色の牙門旗が青空に映えている。
俺達が地下で相手をした奴ら以外の黄巾賊は、逃げ出したり投降した奴もいたらしい。曹操はそのような奴らまでも殺したりはしなかったようだ。『力のない人間を皆殺し』という貧乏くじを引いたのは俺と周羽、そして見ていることしかできなかった3人の義勇軍の将軍達。

もともと普通の民で特に非力な人々が、逃げ場のない閉鎖的な空間に籠っていた。そのことが彼らに戦うしか生きる道がないと信じこませてしまった原因の1つではあろう。
「逃げ道がなくなってしまったことから、生きるためになりふり構わず戦い続ける。そういう状態の兵を一般的には死兵と言うそうですよ。えてして手強く、名の通り全員が死に絶えるまで戦い抜くものです。」
さりげなく一軍から離れた俺と周羽は、先ほど与えられた騎馬の所に向かって歩いていた。砦の中で戦うのに邪魔になるから、目立たない場所につないでおいたのだ。
「・・・あそこを見つけちまった時点でこうなることが決まっていた。そう言いてえのか。」
「はい。曹操軍で戦った中で一番厳しかったのは我々ですね。彼女も、あの場にいたのが不幸だったのでしょう。」
周羽の言葉は俺達のはるか後方で曹操に抗議している于禁を示したものなんだろう。彼女達の姿はもうかなり小さくしか見えないのに、ここまで声が聞こえてくる。
「覇道も大事かもしれないけど、やっぱり紗和は納得できないの！

お腹をすかせた人はさっきの町でもまだたくさん残っていたの。燃やした分の糧食があれば、曹操様が民にあげる分よりもっと多く困っている人達にあげられるはずだから！」
「はあ。燃やしてしまった物は仕方ないし、私だって無い袖は振れないわ。それに、糧食の件については初めにあなたも同意したはずよね。」
「それは、そうだけど・・でも！」
「ええい、うるさいぞ紗和！凪によれば民に手を下したのはあの不審者2人でお前達は何もしていないのだろうが。であれば被害を被っていないお前達が抗議する必要はないだろう。」
「春蘭の言うとおりよ。我が軍で民にできるだけの援助はしているわ。それで満足しなさい。華琳様が困ってるじゃないの。」
「春蘭様、桂花、そう言う問題じゃないんや。」
「真桜・・お前まで何を言い出すんだ。」
于禁と李典は強い語調で曹操に食ってかかっていて、楽進は二人を止めるでもなく、ただ後ろでおろおろとしていた。間に入って宥めている夏侯姉妹は辟易気味だった。
曹操はといえば、ため息一つで流している。つわものだ。

「弱い奴は無条件になんでも助けられるとは考えてねえんだろうな、曹操は。賊は賊だ。」
馬の鞍にまたがって、未だ言いあいをしている女性陣を見やる。あいさつは・・不要だろう。面倒だ。
「大胆にも天下を望む人物ですからね。理想だけではやっていけない事もしっかり理解しているのでしょう。腹の立つことですが、器が大きく、深ければ底に沈んだ少しの泥など気にならないものです。」
「へえ、官嫌いのおまえにしては大分な評価じゃねえか。・・しかし俺あ不思議でしょうがねえんだが、お前はどこからそんな情報を引っ張ってきてんだ？」

「秘密です。では行きましょうか神源殿。」
「あ、コラ、てめえごまかすなよ！」
澄まし顔で馬を走らせる周羽を、一拍遅れて俺が追いかける。目指すは陳留の拠点。曹操の本拠でもあるって事が少し気に入らないが、こうして先行してしまえば追いつかれることはないだろう。お偉いさんが俺達が拠点にしてる区域にくる事はほとんどないだろうから会うことだってないだろう。
だいたい、俺達だって常に陳留にいるわけじゃない。『郭』の本拠は洛陽にあるし、仕事柄基本的に中国全土を渡り歩いている。軍と一緒に戦うなんて変な状況は今回が最初で最後だ。
「じゃあな。」
誰も聞けるはずのない別れの言葉は、風に乗ってあっという間に消えて行った。

9話（後書き）

ここまで読んでくださり、ありがとうございます。
季衣が一言もしゃべってないのはちゃんと理由があります。別に忘れてるわけじゃないんだよ～ってことです。

次は主人公の話ではなく、主人公が去った後の曹操軍の話を書こうと思っています。これからの分岐点になる話になる予定なので気合い入れて書いてきます！

閑話―2　紗和・真桜（前書き）

作者は東北・北海道地域をうろうろしている人間なので、真桜のエセ関西弁はどうかご容赦ください。

閑話―2　紗和・真桜

紗和―1

黄巾砦で賊と戦って陳留へ帰る途中、紗和達は一度陣幕をはって夜を明かす事になったの。紗和も新米だけど自分用の天幕をもらって、そこで寝ることになって。・・・でも今日の戦いのことがぐるぐる頭の中で回って全然寝られなかった。

紗和的にはやっぱり曹操様の言う覇道―『曹操軍は自分達の糧食も確保できないのに遠征し、賊の食料を奪って食べた』なんて噂が立つのが許せない。だから食料は手に入れずに全て燃やさなければいけない―が理解できないの。

だって、その食料を周辺の賊に襲われた町や暮らしに困っている人達に配れば、その人達はきっと曹操様に感謝する。そうしたら曹操様がいい統治者だって噂が広がるから悪いことじゃないと思うの。

紗和達の行動が実際に奪うってことでも、紗和達が食べたわけじゃないから変な噂は堂々と否定すればなんの問題もないの。

それに・・・今日地下で戦ったような人達を救えない、賊だから仕方ないんだって割り切ることはどうしても無理。

紗和や凪ちゃんや真桜ちゃんが義勇軍を立ち上げたのは、戦う力の無い人達を悪い人達から守ろうと思ったからなの。敵として出会ったから、殺す。そんなことをするために立ち上がったんじゃない。力で全部解決しても皆が幸せになれないと思うの。

だから・・・紗和は・・・凪ちゃんの所に行かなきゃいけない。根拠はないけど真桜ちゃんは紗和と同じ気持ちだと思う。凪ちゃんは・・きっと迷ってる。

説得しなきゃ。だって紗和達3人は小さい時からずっと一緒だったんだもん。楽しい時も悲しい時も、そしてこれからもずっと3人一

緒に頑張らなきゃいけないの！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

真桜―1

正直、合わへんなぁ。

曹操様や夏侯惇・夏侯淵両将軍のやり取りでの独特の雰囲気や、ウチからしてみればかっちりとしすぎとる上官への絶対服従。そら、上に逆らわないのが一番なんはわかるで。今日の戦いでもそうやった。賊を殺すにも一切ためらわん。『ウチらと率いてきた連中との練度の違いやー』って言われたらそらそうや、としか言えんのやけど。・・紗和と同じで女や子供やじーさんに対してもあっさりとした対応で、それが『上官が当然のようにやることだから自分達が疑問を持つ事ではない』って理由なのが正直気持ち悪い。お前ら人やなくて人形かいな。

ウチは絡繰がめっちゃ好きや。失敗かて多いけど、好きなことだからそこまで気にしとらんし、絡繰をいじってる時に邪魔されたない。役に立たんから作るな、それやったらもっと仕事せい、鍛錬せい、って頭ごなしに言われたら嫌やなって思う。

会ったばっかりやから、曹操様や他の人がどう言うかは現時点ではわからんけど・・やっぱりええ顔はしないんやろな。雰囲気的に。

自分で言うんもアレやけどウチは好き嫌いが激しい。凪とか紗和とか、好きな人の頼みならやったろ！って頑張れるけど、あんまし好きやない人達にお願いされてもあんまりやちたくない人間や。
やり方は気にいらんけど、黄巾の食料基地は潰したからこの辺の邑は危険じゃなくなった。ウチらの村も安全になった。だからもう無理して戦う必要はないんじゃないかっていうのがウチの考え。少なくとも、このまま曹操軍に居る気は全くない。
紗和もそうや。凪は真面目だからわからんけど。迷ってたとしても多分『一度手を貸してもらったからには、』とか思ってるんやろうなあ・・・。

そんなことを考えながら凪の所に向かって言ったら天幕の前で丁度紗和と鉢合わせした。はは、やっぱしお互い考えた事は同じやったんね。
「凪、まだ起きとる？ちょっと話があるんで、入ってもええか？」
「紗和もいるの！」
「・・・ああ、入って来ても大丈夫だ、二人とも。」
一拍置いて中から凪の声がした。紗和と目を合わせてうなずくと、ウチらは同時に天幕をくぐった。
そこでは、手甲も鎧もなんもはずしてない凪が、地面に座ったまま静かにこっちを見ていた。
「私も待っていた。２人とも多分来るだろうとは思っていたから。」

そう言われたとき、やっぱりウチら3人は以心伝心やな。これで心配ない、みんな一緒や。・・ウチは本当にそう思ったんや。

閑話―2　紗和・真桜（後書き）

恋姫で真桜、紗和という癖のある二人を使いこなせたのは一刀のすごいところであり、魅力だと思います。一刀という緩衝材があってこそ生きた人材、歴史を覆す赤壁の勝利への力となったんだろう。

それに、最初の方にいた魏の武将はみんな華琳への愛が強すぎて、基本的にイエスマンしかいなかったように思います。霞とか、風とか、稟が入ってようやくバランスが取れたのではないかと。

さて、次は凪の話です。曹操軍を離れる決意をした二人に対し、彼女はどう答えてのでしょうか。

閑話―3　凪（前書き）

お気に入り登録、感想など本当にありがとうございます！本当に力になります。今回は凪視点となります。

閑話―3　凪

凪―1

声を荒げても押し寄せてくる黄色の波は収まらなくて。
訴えれば訴えるほど波は強く激しく私たちの方へ向ってきて。
どうしたら良いのかわからないまま、目の前に立ちはだかった二つの壁が黄色の波を赤い池に変えて行くのを、私はただ呆然と見ている事しかできなかった。

あの地下室からどうやって自分が上まで登って外に出たのか、はっきりとは記憶していない。かろうじて覚えているのは立ちつくしていた私の背中をそっと押してくれた誰かの大きな手の感触だけ。記憶がきちんとあるのは真桜と紗和が華琳様に抗議をし始めたあたりからだ。
どうにかその場が収まった時には神源殿と周羽殿の姿は無かった。助けてもらったお礼も謝罪も、何一つできないままで。紗和と真桜も気がつかなかったらしい。華琳様も、彼らが姿を消した事をとても残念がっていらした。『男であっても優秀な人物であることは確かだった。できることなら手に入れたかった。』と。春蘭様など古参の将は彼らに協力した華琳様何も言わず居なくなった事をとても怒っていらっしゃったが、華琳様は額を抑えてそんな彼女たちをいさめていた。
曰く、
『助けてもらったのはこちらの方よ。賊の正確な情報を与えたのも、一番過酷な場所で戦って凪達3人を生かしたのも彼らでしょう。感謝しこそすれ、怒る場面では無いわ。』
と。

私もそう思う。
真桜と紗和は地下で老人や子供をあっさりと殺したあの人達をよく思っていない。私も、見た時は酷いと思った。いや、思う思わないではなく、力ない人相手に刀を向けるのは酷いことなのだろうけれど。
ただ、もし・・もしあの場に神源殿も周羽殿もおらず、あの数百人と対峙したのが我々3人だけだったとしたら。説得も何もきかず、我々に一斉に襲い掛かってきたとしたら。

最終的に私も、あの人達と同じことをするだろう。

力の無い人々を助けるために立ち上げた義勇軍。だが、その力無い人々を助ける事と引き替えに紗和と真桜を失う事なんてできない。そもそも、年齢、性別に関係なく命は平等だ。それならば武をもって立ち上がった時点で、酷い事をするのだと、しているのだと自覚していなければならなかったんだ。
私は、私達は甘かった。

華琳様は自らの評判の為に糧食を燃やした。その件に関しては私も納得していない。ただ、武をもって乱世に立つと言う意味を、あの方や曹操軍の将軍方は私よりわかっている。だからあの行動も、甘い我々には理解することができない何かがあるのだろうが。
だからといってそれを心で受け入れられるかは別の問題だ。このまま華琳様に仕えて戦い続けるか、それとも離れるか。紗和や真桜は心で動く。2人は多分ここには残らない。
私がこのまま残っても心の底から華琳様には仕えられない。だが、義勇軍ごと受け入れてもらった恩もある。

私はどうすべきか。いや、どうしたいのか。

着替えもせず、与えられた天幕でずっと考えていたが、答えは出なかった。気がつけば辺りは暗く、空には星が点々と散らばっていた。
「灯を入れるか。」
重い腰を上げて燭台に火を灯すとぱっと天幕の中が明るくなる。その優しくて淡く揺れている赤い火は神源殿の瞳のようだ。

不意に彼の顔が私の中に浮かんできたと同時に、天幕の外から紗和と真桜の声がした。
「凪、まだ起きとる？ちょっと話があるんで、入ってもええか？」
「紗和もいるの！」
「・・・ああ、入って来ても大丈夫だ、二人とも。」
あまりに合いすぎたタイミングに一瞬返事が遅れてしまったが、２人に入って来て良いと言った。すぐに難しい顔をした顔をした二人が入ってくる。・・何をしに来た、なんて聞くまでもない。
「私も待っていた。２人とも多分来るだろうとは思っていたから。」

大丈夫。私はもう、揺らがない。

閑話―3　凪（後書き）

一言でいえば、難産。書きたいことは決まっていたのにこんなに苦労したのは久々でした。うむむ。

真恋姫・無双初期の凪のイメージのまま書いてみました。
しかし、このペースで曹操軍を書いていくとしばらく主人公出てこない疑惑が・・・。もう少しサクサク進めるように頑張ります。

閑話―４　三羽烏（前書き）

いつもより長めです。こんだけ長く書いたのは久しぶりかも・・・。

閑話―4　三羽烏

「なんや凪、準備万端やん。鎧も手甲も全部つけて、一体どこに行く気やったん？」
「やっだなー、真桜ちゃん。行くところなんて決まってるじゃん。」
真桜がいたずらっ子のような顔をして凪の格好を指摘すると、紗和が心底嬉しそうに笑った。対する凪は困ったような、複雑なような表情をして頬をかいた。
「いや、その、これはただ外すのを忘れていただけで・・・とにかく二人とも座ったらどうだ。」
とりあえず、という様子で凪が真桜と紗和を促すも、二人はそろって首を振った。
「いいよいいよ、凪ちゃんの準備ができてるなら何の問題もないもの。すぐに出発すればいいだけなの。」
「せやな。食料はちょっと心配やけど、近くの町で買える分くらいの金は残っとるし、ウチらの村に戻れば三人分くらいすぐ食わしてくれるはずや。」
「さっすが真桜ちゃん！紗和、そんなところまで考えてなかったの。」
「いやー、紗和さんそんな褒められたら照れてまうやん。こんくらい当然やで、と・う・ぜ・んっ！」
天幕の入り口付近できゃっきゃと騒ぐ二人からすっと目をそらし、凪は一度大きく深呼吸した。
そして静かに、二人の名前を呼ぶ。
「真桜。紗和。」
「なに？凪ちゃん。」
「なんや。ウチの完っ璧な計画に何か問題でも？」
きょとんとした二人に対して、凪は真剣な表情で

「私は、ここに残る。」
そう、言いきった。
「二人が来る少し前に決めた。私は曹操軍の将として、ここで戦う。・・・たとえ、二人がここを出て行くとしても。」
「えっ・・・。」
淡々と語る凪に、紗和と真桜は呆然として口を閉ざした。ずしりと思い沈黙がその場に落ちる。

最初に沈黙を破ったのは真桜だった。
「本気なん。」
「ああ。」
間髪いれずに凪がうなずく。真桜は不思議そうな顔で首を傾げた。
「ここの奴ら、『覇道のため』とか、ようわからん理由で弱い人も淡々と殺してく連中やで。こんな、それこそ機械ばっかり集めたような軍に残るって、ウチからしたら狂ってるとしか言えへんのやけど。」
それに続いて、紗和が座り込んで凪の手を握り、必死に語りかけた。その目には涙がうっすらと浮かんでいた。
「そうだよ！思い出してよ凪ちゃん！凪ちゃんが最初に力のない、困ってる人達を助けたいから義勇軍を作ろうって言ったんだよ。紗和も、真桜ちゃんも、そうだって思ったから一緒に苦労してここまでやってきたんじゃない。それなのに、困ってる人達より自分の事だけ考えてる人達と一緒に残るなんておかしいの！凪ちゃん、考え直して。紗和達と一緒に行こうよ。」
「・・・ごめん。」
泣いている幼馴染みの顔をさすがに直視することができなかったのだろうか。凪は地面に視線を落とした。しかし、首を縦には振らない。
「どうしてっ。」
紗和が悲痛な声で叫ぶも、凪はごめん、を繰り返すだけ。

それを見ていた真桜が立ったまま腕を組み、大きなため息をついた。
「凪も、曹操様の考えに全面的に賛成しとるわけやないんやろ。」
「それは・・・・、確かに納得できない事の方が多い。」
「じゃあなんで。義勇軍の奴らを残してウチら三人が消えても、評判を大事にしとる曹操様のことや。『全員殺す』なんて言わへんよ。・・それともまさか、前の邑での戦で助けてもらったのを恩に感じて動けへんとか言わんやろな。あれはウチらと曹操様の軍が協力してギリギリやったんから貸し借りはゼロや。」
「そうじゃ、ない。私は・・・私はただ、もう一度会いたいだけなんだ。」
凪は視線を落としたまま、絞り出すような声で言った。真桜が怪訝そうな顔になり、紗和も涙を止めてきょとんとした。
「会いたい・・・て誰に？」
「わざわざ会う必要があるってことは、この軍にいる人じゃないんだ！？この軍にいる人じゃないならなおさら紗和達と一緒に来ればいいんだよ。凪ちゃん一人置いて行くくらいなら人探しなんてなんてことないの。」
紗和がぎゅっと強く凪の手を握り直し、うつむいている顔をのぞきこんだ。説得のきっかけと捉えたらしく、紗和の目が輝きを取り戻している。
しかし、凪は苦しそうな顔をして紗和の視線を避けるようにして顔を背けてしまった。
「無理だ。私が会いたいのは神源殿だから。・・華琳様は陳留を拠点として行動している。あの人達は武器は持っていたが軽装で、大した食料も持っているように見えなかった。だからこの付近にある陳留に滞在している可能性が高い。」
「だから、ここで軍を抜けて陳留に入れんようになるんは困る、と。そういうことやな。」
「・・うん。」
凪は真桜の問いにこくりとうなずいた。

「神源殿にも、周羽殿にも助けて頂いた。なのにお礼すらしていない。彼らに会って、お礼を言って話してみて。そうしないと私は前に進めない。そう、思うんだ。」

わがままで、ごめん。

消え入りそうな声で、凪は言った。再び天幕に沈黙が落ちる。

しばらくして。ふ、と紗和が握っていた手の力が弱くなり、優しく包み込むようなものに変わった。凪がはっとして顔を上げると、紗和は泣きそうで、でも笑顔を浮かべて凪を見ていた。

「あーあ、紗和も真桜ちゃんも振られちゃったの。今日会ったばっかりの男の人に負けちゃうなんて悔しいけど。・・凪ちゃんが決めちゃったなら仕方ないの。」

「紗和。」

「しゃーないな。こんだけ言っても無理なら、これ以上は時間の無駄やね。・・あの人達に会ったらウチと紗和の分も礼言っといて。助けられたんは確かやけど、地下であん人らがやった事は許せへんから。もう一度会いたいとは思っとらんのや。」

「紗和も、なの。」

ふわりと、紗和の手が凪から離れた。紗和はゆっくりと立ち上がり、真桜の隣に並ぶ。悲しそうな顔ではあったけれど、その顔にもう涙は無かった。

不安そうな凪を安心させるように真桜がニカリと笑った。

「そんな顔せんでも、別に凪を嫌ったりせえへんよ。ちょっと違う道を行くだけの事やもん。友達なんは同じや。」

「そうそう。紗和も、真桜ちゃんも、凪ちゃんも、ずっとずっと友達なの。」

「辛くなったらいつこっち来てもええんやで。もちろん今すぐが一

番なんやけどね。無理なんやから、しゃーない。」
そう言って、真桜は紗和の肩をぽんと叩いた。
「行くで、紗和。」
「うん。じゃあ、またね。凪ちゃん。」
紗和も名残惜しそうにしながらも、真桜に促されて凪に背をむけた。
こんな状況でも『またね』と言うあたりが紗和らしい、と凪は思い、軽く笑った。
「・・・・・あ。」
天幕を出て行く寸前、真桜が思い出したように後ろを振り向いた。
「恋する乙女なんはええけど、本当に結ばれた時は必ず連絡してや。全力でからかいにきたるさかい。」
「ま、真桜!?私は別に、そんなつもりは!」
「ありゃ、言ってみただけなのに意外な慌てよう。こりゃ凪さん、本気かもしれへんで、紗和さん。」
「あはは、凪ちゃん真っ赤なの。」
「真桜!紗和!」
こらえきれなくなった凪が叫ぶ。
「冗談やって。そんな怒らんで。・・・次に会うまで死ぬんやないで、凪。」
「―でも、本っ当に凪ちゃんにそんな人が出来たら教えてほしいの。約束だよ!」
「さ、紗和・・。」
ははは、と二人は笑いながら天幕を出て行った。最後まで仲良しの三人らしい、やりとりだった。

実はこの三人、意外な場所で再開することになるのだが、それはまだ先の未来。彼女らがどこへ行き何を為すのかは、まだ誰も知ることはない。

閑話―４　三羽烏（後書き）

このような形で決着することとなりました。紗和と真桜の熱意に凪が負けて・・という展開になりそうで、数度書きなおしたのは秘密です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8741v/

真・恋姫無双　神と人との狭間に生まれて

2011年10月2日01時02分発行